

村正の鉈

昔、烏山の辺りを治めていた那須家と常陸の佐竹家の間で、争いの絶えなかつた頃、都に村正と言う名の刀鍛冶がいたと。彼の鍛えた刀は切れ味が鋭く、「村正の名刀」として世に知られていたと。

ところが、いつの頃からか、

「村正の刀は人の血を吸わずにはいられねえ妖しい刀だ」

という評判が立って、都には、いられなくなり、流れ流れて、下野の国那須の郡向田の芝原という所にたどり着いたんだと。

そこには、円寿院というお寺があつて、観音堂が立っていたと。村正は、そのお堂の近くに小屋を建て、お百姓さん相手に鋏や鎌、鉈などを鍛えて、細々と暮らすようになったと。

その近所に貧乏な木こりの爺さんが住んでいたと。爺さんの鉈はもう古くてぼろぼろ

だったんだけど、新しいのをかう金がねえ。それで、ある日思い切つて村正の所に行き、「村正さま、金のかわりに、毎日一束ずつ一年間薪を届けるから、鉈をこしらえてください」

と頼み込んで、村正に新しい鉈を鍛えてもらったんだと。

その鉈の切れること。太い木でも、固い枝でも、まるで大根でも切るように、スパツ、スパツと切れる。爺さんは毎日大喜びで仕事に精を出していたと。

ある日、爺さんは那珂川の近くのゆうげい山の崖っぷちで木を切っていたと。その崖の下はもりっこ淵という深い淵で、どすぐらい水が渦を巻いていて、村の漁師たちも近付かない気味の悪い所だったと。

仕事に疲れた爺さんは一服すつべと、崖のところに腰を下ろしたと。すると、どうゆうわけか、急に眠くなり、鉈を枕元に置いて、ぐっすり寝込んでしまったと。

しばらくすると、淵の中から大蛇が現れ、ずるっずるっと崖を這い登つて来た。

大蛇は爺さんを一飲みにしようと近づいて来た。ところが、大蛇は何かに怯えたようにググツと鎌首を引っ込める。また近づこうとするが、またブルブルと後ずさり。

なんと、それは爺さんが枕元に置いた鉈のせいだった。

その鉈は、大蛇が爺さんに近づこうとする度に、ピカピカッとあやしい光をはなつ。さすがの大蛇も諦めて、もりっこ淵の底深くかくれちまったと。

ちようどその頃、下境の大將小屋のあたりで、佐竹の殿様が陣を張っていたと。

殿様は、野上のゆうげい山のあたりでピカピカッと光るものが見えたんで、さっそく物見の者をやったと。

物見の者は、その光が木こりの爺さんの鉈の光で、その鉈は、あの有名な村正が鍛えたものだと言ったと。

それを聞いたお殿様はその鉈が欲しくなり、爺さんに譲ってくれるように頼んだと。ところが、爺さんは

「その鉈は、村正さまが親切に鍛えて下さった大切な鉈だ。よそ様にお譲りしたんじゃあ、村正さまに申し訳がたたねえ」

と、頑として聞きいれなかったと。

それで、殿様は、
「しからは、その鉈と一緒にそちらのことも召抱えよう」

ということになり、爺さんは佐竹藩のお侍になり、鉈は殿様さまのものになったんだと。村正の鉈は桐の箱に入れられ、いつもお殿さまのそばに置かれ、お殿さまがおでかけ

になる時は、行列のおかごにのせられてどこへでもお供をしたんだと。

おしまい